

を授けてまで井戸を掘りたいという市民がこれ程多いという事実は、明らかに県の水行政に対する不信を表わしているといえるでしょう。

V 質問六、八について

霞ヶ浦の汚濁が進んでいるのを知っている人は、市民の約九四％(表一)、鯉の大量死を知っている人は八九六％でした。この値は、私たちが想像していたよりも、やや低い値でした。市民の二〇人に一人は霞ヶ浦の汚濁を知らず、更に一〇人に一人は鯉の大量死事件を知らないという事は、実に驚くべき事実です。特に十代及び六十代以上の年代の女性は、六、八ともそれぞれ八三二％、七八一％といちじるしく低い値を示しているのが目立ちます。(表三)

VI 質問七について

霞ヶ浦汚濁の進行を知ったのは、新聞などのマスコミによって、というのが六七四％目で見えてが五二六％(%)は、全回答者に対する割合を示す)つまり、霞ヶ浦の汚染の進行を、じかに見た人は、市民の約半数という事になります。これは意外に低い値であり、質問二で、飲料水に不安を感じていると答えた人一、三八六名のうち三七八名、つまり二七三％が湖のよごれを見ずに不安を感じているという事を示しています。

これらの事実を考慮すると、マスコミの報道が市民に与える影響が如何に大きいか、という事が改めて認識されると共に、その報道の正確さと、市民意識の啓蒙に対する役割が、更に強く要求されているといえるでしょう。

VII 質問九について

霞ヶ浦の汚染の原因に関しては、工場排水とする者が最も高く六六七％、ついで生活排水が五九四％、家畜排水五四九％と続いています(表一)茨城県の発表によれば、霞ヶ浦の汚染の原因は、工場排水が三分の一、周辺市町村よりの生活排水が三分の一、養豚排水が三分の一であり、水ガメ化や鹿島工業地帯への大量排水は、ほとんど関係ない、としておりますが、土浦市民は、常陸川逆水門の閉鎖を前提とした水ガメ化や濁水時の導水などについてすこぶる懐疑的であるという事ができます。

農業排水を汚染の原因とする者は二五二％と低値を示していますが、これは学問的にもどれぐらい水質汚染に關与しているものか、研究段階にあり、はっきりりと汚染源を断定する事は、現在のところ無理があるように見えます。